

# パーキンソン病における「痛み」についての

## アンケート調査（第1報）

岡田 芳子（パーキンソン病患者・皮膚科医・APPLE 協同管理人）

茨木 和子（山梨県患者・ピアサポーター）

橋爪 鈴男（患者・くわのみクリニック皮膚科・HOPE 代表世話人）

久野 貞子（京都四条病院パーキンソン病神経難病センター）

### I. はじめに

パーキンソン病（以下PDと略す）は錐体外路性運動機能障害を来す疾患として、主として運動症状に対する臨床研究が先行し、運動症状に対しては特効薬L-DOPAをはじめとする種々の薬物治療が開発され、さらに、薬物療法のみでは不十分な運動合併症には外科的治療が追加され、患者のADL/QOLの向上が図られてきた。

その一方で、自律神経症状や精神症状などの非運動症状は、従来のドパミン補充療法では十分な効果が得られない症状として注目されるようになり、今や、PDは黒質線条体ドパミン神経機能不全症にとどまらず、全身性の神経変性疾患としてとらえるのが妥当と考えられるようになってきた。

非運動症状のなかで「痛み」については、1817年にJames Parkinsonが彼の著書「An Essay on the Shaking Palsy」<sup>1)</sup>の中で、患者の「pain」について触れているにも関わらず、冒頭の第1章で「感覚と知能は侵されない(uninjured)」と記載したことや、1979年の国際疼痛学会で「痛み」の定義がなされるまで「痛み」が感覚障害の一つとして科学的に認識されてこなかったことが、PD患者の痛みに対する医療者側の無関心を呼んだと思われる。「痛み」は客観的に測定する手法に

乏しく、患者の主観的訴えに頼らざるを得ないことも「痛み」に関する研究が進展しなかった理由と考えられている。しかし、最近になって臨床疫学研究報告もなされるようになり、400症例以上の検討が4論文<sup>2)~5)</sup>でなされている。患者同志の会話で「痛いのが辛いので主治医に相談したところ、『PDに痛みはない』という返事で患者の訴えに耳を傾けてもらえない」と、神経内科医の中でもPDの痛みについて十分な理解がなされていないとの訴えを耳にする。この理由としてはPDの特徴としての4徴あるいは3徴が運動障害のみである点も理解されていないことの一つであろう。

患者の立場からは「痛み」は自覚症状であるため、運動症状のように他覚的に診て貰うのが難しく、さらに痛みの性状、程度、辛さなどを主治医や介護者に的確に伝えることができないのが現状の問題点である。

「痛み」があると気分的にも暗くなり、「痛み」が続くと、日常生活で運動障害のあるPD患者のQOLをさらに低下させることは自明である。

そこで、「パーキンソン病に伴う痛み」についてのアンケート調査を行い、PD患者の「痛み」の実態をある程度検討したので、その結果を報告する。

## II. 方法

詳細な質問内容のアンケートを行うと、得られる情報量は大きい。「痛み」のある患者の割合を知るために細かい回答を求めると回収率が低下することを恐れたので、第1次調査として以下の項目について質問票を作成した。

1. 性別
2. 年齢
3. 診断されてからの年数
4. 主な症状
5. 痛みの有無
6. 痛みのある部位
7. 今後の詳細調査への協力の可否

アンケートの配布及び回収方法は、以下の手渡しとWebの二つの方法を用いた。

1) PD友の会の支部やその他のPDに関連した集会や講演会の会場内で参加者に手渡しその場で回収、あるいは支部、各地域の活動団体や知人を通じて郵送で配布・回収した。

2) 手渡しで配布したアンケートとほぼ同じ内容のものをWeb上でGoogleツールを使って作成し、APPLE（明るく生きるパーキンソン病患者のホームページ (<http://www9.ocn.ne.jp/~pdiyasi/>)内の掲示板、及びSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）を通じて協力を呼びかけ、インターネット経由で配信・回収した。

アンケート用紙による調査の一部及びインターネットでの配信の際に下記の項目を追加質問した。

8. 痛みが生じる時
9. 痛みがあるときの対処法
10. 痛みについて思うこと、その他意見など

アンケートは無記名でも可としたが、今後さらにパーキンソン病における痛みの詳細についての調査（2次調査）に協力のある人には住所、氏名、連絡先を記入してもらった。

表1 アンケートの回収率

| 性別 | 回答者数 | 全体に対する割合 |
|----|------|----------|
| 男  | 211人 | 42%      |
| 女  | 291人 | 58%      |

表2 インターネット回答者の内訳

| 年齢   | 男   | 女   | 計   |
|------|-----|-----|-----|
| 30歳代 | 2人  | 1人  | 3人  |
| 40歳代 | 10人 | 13人 | 23人 |
| 50歳代 | 7人  | 17人 | 24人 |
| 60歳代 | 8人  | 10人 | 18人 |
| 70歳代 | 1人  | 2人  | 3人  |
| 計    | 28人 | 43人 | 71人 |

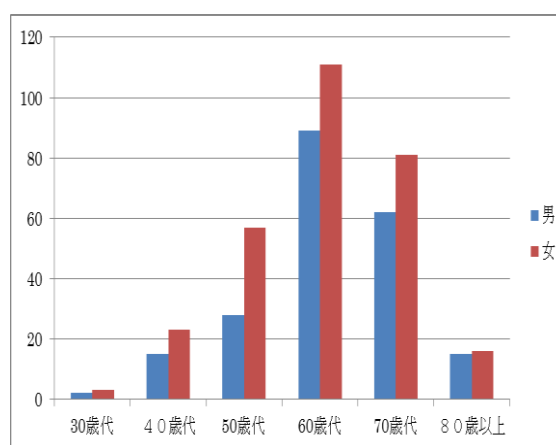


図1 回答者の年代別分布

### Ⅲ. アンケート回答者についての内訳

- ① アンケート用紙の配布による回収率は68%（インターネット分は含まず）であった。回答者の総数は502人で、男性211人（42%）、女性291人（58%）であった（表1）。
- ② 回答者の地域分布は27都道府県にわたり、京都府91人、東京都82人、埼玉県67人、山梨県37人、石川県35人が多く、この5都府県で全体の60%を占めた。  
インターネットで回答した人は71人でその内訳は表2の通りであった。

- ③ 回答者の年代別分布  
60歳代が201人（40%）と最も多く、70歳代143人（28.4%）、50歳代85人（16.9%）であった（表3、図1）
- ④ 回答者の病歴の長さによる分布  
6-10年146人（28.9%）、1-5年128人（24.7%）、11-15年104人（20.5%）の順であり、病歴10年未満が53.6%を占めている。  
表4の1年以下と2-5年を、16-20年と21年以上をそれぞれ合算したものを図2に示した。

表3 回答者の年代別分布

| 年齢分布  | 人数  | 構成比率(%) |
|-------|-----|---------|
| 30歳代  | 5   | 1.0     |
| 40歳代  | 38  | 7.6     |
| 50歳代  | 85  | 16.9    |
| 60歳代  | 201 | 40.0    |
| 70歳代  | 143 | 28.4    |
| 80歳以上 | 30  | 6.0     |

表4 アンケート回答者の病歴別分布

| 病歴     | 人数  | 構成比率(%) |
|--------|-----|---------|
| 1年以下   | 8   | 1.6     |
| 2-5年   | 124 | 24.7    |
| 6-10年  | 146 | 28.9    |
| 11-15年 | 104 | 20.5    |
| 16-20年 | 54  | 10.7    |
| 21年以上  | 58  | 11.6    |
| 記載なし   | 8   |         |
| 計      | 502 |         |

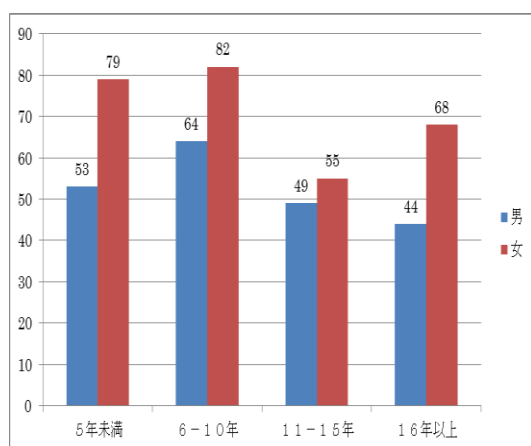


図2 アンケート回答者の病歴別分布

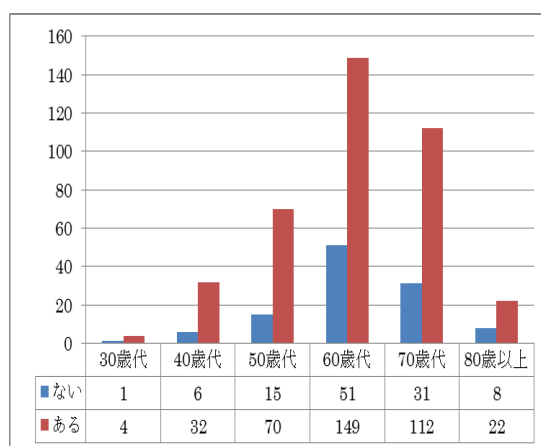


図3 年代別の痛みの有無

#### IV. アンケートの集計結果

① 性別による痛みの有無について  
(表5)

痛みのある人は 502 人中の 389 人 (男性 153 人、女性 236 人) で、男性では 72.5%、女性では 81.1%、全体として平均 77.5%のPD患者が痛みを感じていることがわかった。

② 年代による痛みの有無について  
痛みのある人の実数では男女ともに 60 歳代、70 歳代、50 歳代の順に多かった (図3) が PD は好発年齢が中高年であり、これを補正するために、各年代別に痛みのある頻度 (図4) をみると 40 歳代 (84.2%) が最も高く、50 歳代 (82.3%)、30 歳代 (80%) の順であった。

表5 性別と痛みの有無

|       | 男     | 女     | 計     |
|-------|-------|-------|-------|
| 痛みがある | 153 人 | 236 人 | 389 人 |
| 痛みがない | 57    | 55    | 112   |
| 記載なし  | 1     | 0     | 1     |
| 計     | 211   | 291   | 502   |

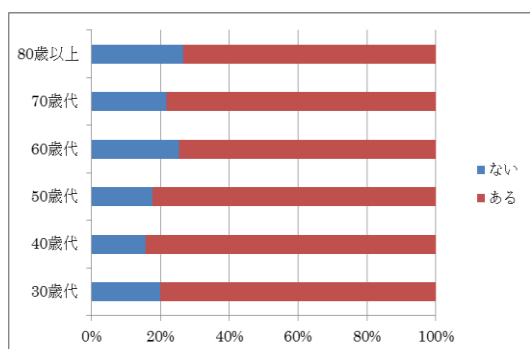


図4 年代による痛みの頻度

③ 病歴の長さと言みの有無について  
痛みのある人の実数では病歴 6-10 年が多く、各病歴の長さ別に痛みの頻度をみると病歴 11-15 年が 85.6%で最も高く、その他は 72~77%であり差がなかった (図5)

④ 痛みのある部位について  
痛みのある部位については、全身を 14 の部位に分け、痛みを感じる部位をすべて挙げてもらう形で調べたところ、男女の合計では腰部が格段に多く、全体の人数の 63.2%の患者が腰痛を訴えていた。ついで、腕、背中、肩がほぼ同じ数であった (図6)。

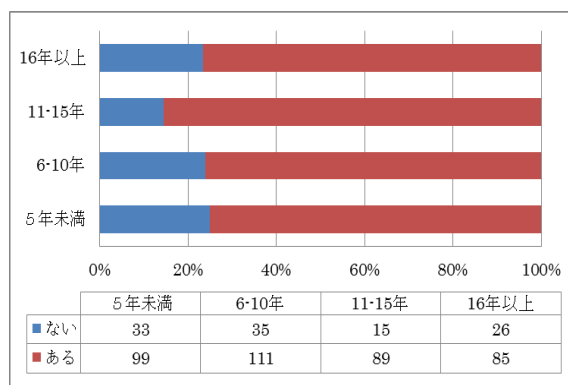


図5 病歴の長さと言みの有無

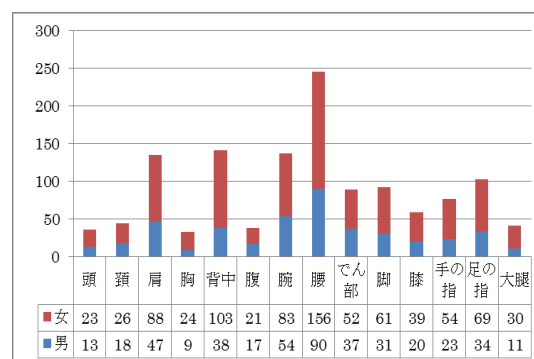


図6 痛みのある部位

また、男女別に痛みのある部位のうち上位 6 か所を取り出してグラフを描いて調べてみると、男女ともに腰痛が多いが、女性で背中に痛みのある人が多い傾向がみられた（図 7）。

一人の人がいったい何か所に痛みを感じているのかを知るために、痛みのある部位の数を調べたところ、40 歳代（38 人）で痛みのある人（32 人）の平均は 4.81 か所、70 歳代（143 人）で痛みのある人（112 人）の平均は 3.16 か所であった。

また病歴別では、病歴 1-5 年で痛みのある人（93 人）の平均は 3.13 か所、病歴 16 年以上で痛みのある人（84 人）は平均 3.36 か所であった（図 8）。

また痛みのある部位が 1 か所というのは病歴 5 年未満、6-10 年の人に多かったが、痛みのある部位が 2-6 か所あるのは病歴 6-10 年の人に最も多かった。

また、全身 14 か所のうち 11 か所という広範囲に痛みのある人がいた（図 8）。

年代によって痛みのある部位に差があるかどうかを調べるため、40 歳代と 70 歳代について調べてみたところ、40 歳代では、肩、腕、手の指、でん部、背中、腰の順に痛みが多く、70 歳代では、腰、足の指、背中、腕、足、肩、膝の順であった。（図 9）

### ⑤ 痛みがひどくなるときについて

502 名の回答者のうちインターネットによる回答者 71 人、及び配布回収による回答者の中の 126 人が追加質問に応じてくれた。

記述式で書いてもらった文章中から言葉を拾って項目別に分類してみると、以下のものであった（表 6）。

薬が切れたときが 64 人で最も多く、次に同じ姿勢でいるときや立っているときが 45 人、朝起きたときが 28 人の順であった。また、11 人が常に痛いと訴えていた。

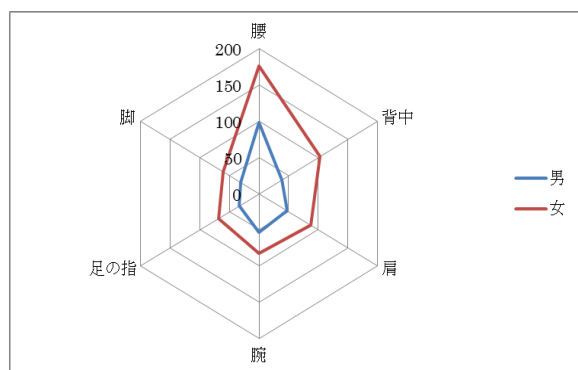


図 7 痛みのある部位（上位 6 か所）と性別

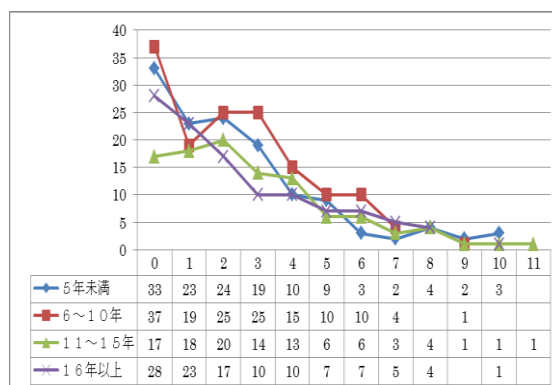


図 8 病歴の長さで痛みのある部位の数

表6 痛みがひどくなる時

|                  |     |
|------------------|-----|
| 薬の切れた時           | 64人 |
| 同じ姿勢でいるとき、立っている時 | 45  |
| 朝起きた時            | 28  |
| 身体の曲がり、姿勢異常      | 13  |
| 天気との関係           | 13  |
| 寝不足。疲れのあるとき      | 13  |
| 常に痛い             | 11  |
| 長時間の歩行           | 10  |
| つっぱり、こわばり        | 10  |
| 寝ている間            | 10  |
| ジストニア            | 7   |
| 寝返りする時           | 5   |
| 手を使った時           | 3   |
| ジスキネジア           | 3   |
| 腰を使った時           | 2   |

その他

- ・パソコンのし過ぎ
- ・不定期に痛くなる
- ・食べ過ぎ、便秘
- ・作業をしようとしたとき
- ・こむら返り
- ・立ち上がる時
- ・椅子にかけるとき
- ・無理をした時
- ・着替えのとき
- ・心理的な影響  
(興奮、緊張、イライラ、怒った時)
- ・気分が落ち込んでいるとき
- ・腕を振らずに歩いた時
- ・筋肉のけいれん
- ・動きすぎたとき

表7 痛みのある時の対処法

|                         |     |
|-------------------------|-----|
| 湿布                      | 58人 |
| マッサージ                   | 56  |
| 動かない・横になる・じっと耐える・コルセット  | 55  |
| ストレッチ・リハビリ・カイロプラクティス・指圧 | 44  |
| 温める・ホカロン・カイロ・風呂         | 23  |
| 痛みどめ                    | 20  |
| パーキンソン病治療薬              | 14  |
| 鍼灸                      | 8   |
| 体位交換                    | 8   |
| 気を紛らす                   | 6   |
| 深呼吸                     | 3   |

その他

- ・痛いところの力を抜く
- ・自分でたたく
- ・神経ブロック
- ・ボール投げ
- ・骨盤矯正
- ・家庭用超音波治療機
- ・痛い痛いと言いつつ念仏のごとく繰り返す
- ・鉢巻きをする
- ・ベッドのマットレスを厳選

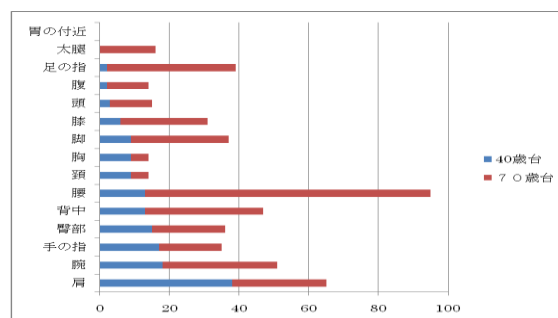


図9 痛みのある部位の年代による違い (40歳代と70歳代)

⑥ 痛いときの対処法について

前項と同様に記述式の文中から言葉を拾って、痛いときにどのように対処しているかについて分類してみた (表7)。その結果、湿布 58人、マッサージ 56人、じっと動かない・横になる 55人、ストレ

ッチ・リハビリ・カイロプラクティスなど 44人、温める 23人、痛みどめ 23人、パーキンソン病治療薬 14人となっており、患者が各自の工夫によって対処していることが窺われた。

## V. まとめ

過去の国内外の「PD 患者の異常感覚・疼痛の頻度」についての報告はいくつかあり、38%<sup>6)</sup>～83%<sup>7)</sup>の報告がある。今回の私たちの調査でも男性で 72.5%、女性で 81%、全体で 77.5%と高い頻度で見られた。このことは PD 患者の 4 人のうち 3 人が身体のどこかに痛みを感じているということになり、PD の症状としてもっと注目されていていいものと思われる。患者自身がその痛みを適切に表現できないこと、また医療側からは運動症状のように客観的に診断しにくいことから、見逃す可能性の強い症状といえる。

年代による痛みの頻度にはあまり差がないが、腰痛や膝の関節痛などが一般に高齢になるとともに多くなることを考え合わせると、PD 患者特有の痛みとしては若年世代（30 歳代、40 歳代）の方がむしろ頻度が高いといえるかもしれない。

病歴の長さによる比較では、病歴 11～15 年で 85%と高く、その他はだいたい 75%でそれほど差がなかった。なぜ、この病歴の患者群が他群より 10%高いのかに関しては不明である。

また、痛みのある部位の数についても、40 歳代の平均部位数が 70 歳の部位数よりも多かった。PD の痛みが病気の進行に伴うものであれば、病歴の長い人に頻度が高いのはうなずけるが、病歴の短い人でもあまり変わらないということは痛みが早期から現れ、その後継続すると考えられ、「痛み」の出現には個人差があると解釈される。

今回の調査では「痛み」の出現時期について、「痛み」が他のパーキンソン症状

よりも先にあったかどうかについては質問しなかったが、「痛み」が初発症状となる患者も少なくないことを考慮すると、「痛み」は PD の随伴症状等ではなくて、むしろ非運動症状の中では主要症状の可能性はある。

「痛み」の部位として腰部が多いのは PD が加齢に伴って生ずる病気であり、変形性腰痛症や腰部脊柱管狭窄症などの合併症を伴いやすいこと、PD の症状として前傾姿勢になりやすく、腰に負担がかかりやすいこと、不自然な姿勢での歩行や家事などにより腰周囲の筋肉が「痛み」を引き起こすこと、などが推定される。

また、「痛み」のある部位として 70 歳代では腰痛が圧倒的に多いのに対し、40 歳代では肩・腕・手など上半身の「痛み」が多いが、これは日常生活での活動性とも関連している可能性がある。

PD に伴う「痛み」の分類では Ford による病因に基づく分類<sup>4)</sup>と Quinn らによる「痛み」の生ずる病期による分類<sup>5)</sup>及び Sage による L-dopa の治療状態によるもの<sup>6)</sup>等あるが、Ford のものが使われることが多く、次のように分類されている。

1. musculoskeletal pain:筋骨格性痛
2. radicular or neuritic pain:根性・末梢神経性痛
3. dystonia-related pain:ジストニア関連痛
4. primary central pain:中枢性痛
5. akathitic pain:アカシジア様不快感

今回の調査では、「痛み」の詳細について質問項目に入れなかったため、病因、特効薬 L-dopa との関連に関する分析が困

難であるが、2次調査では

1. 痛みの種類（どのような痛みか？）
2. 痛みの程度
3. 痛みの生じるとき
4. 痛みの持続時間
5. 痛みとPD症状の発症時期との関係
6. 痛みと抗パーキンソン病薬との関係
7. ジストニアに伴うものかどうか？
8. 精神的な状態との関係

などを調査項目にいれてもっと詳細な調査を行う予定である。

国内ではPDの痛みを対象とした大規模な臨床的検討は行われていないが、さらに詳細な「痛み」に関する疫学調査を行う事は、今後の治療薬開発に対しても意義があると考ええる。今回のアンケート調査の結果をみても、PDの「痛み」に特効を示すものがなく、患者がいろいろと苦慮しているのが伺え、PDの痛み対策に対する遅れを一刻も早く取り戻す努力が必要と痛感した。

最後に1人のパーキンソン病患者の声を掲載する。

40歳代、女性、病歴1年以下

「パーキンソン病単独では痛みはそんなに感じることはない」と主治医にいわれたこともあるが、でも、やっぱり痛いものは痛い。骨というか、骨の周りの筋肉というか、とにかく突っ張ってしまって痛い。なぜ、医師は「痛みはないはずだ」というのだろうか。こんなにも大勢の人が痛みを訴えているのにどうして認めてくれないのだろうか。

## VI. 結論

PD患者502名のアンケート調査により患者の77.5%に「痛み」を伴うことがわかった。「痛み」は患者のQOLの低下につながるため、「痛み」に対しての医療者側の理解が深まることが重要と思われる。

今後2次調査を行って、「痛み」の質についてさらに検討を行い、患者の「痛み」の克服に更なる貢献ができることを期待している。

## 文献

- 1) An Essay on the Shaking Palsy:ジェイムズ・パーキンソンの人と業績：豊倉康夫編、診断と治療社、東京
- 2) Giuffrida R et al. Pain in Parkinson's disease. Rev. Neurol(Paris) 161: 407-418, 2005
- 3) Negre-Pages L. et al. Chronic pain in Parkinson's disease: the cross-sectional French DoPaMiP survey. Mov. Disord 23: 1361-1369, 2008
- 4) Defazio G. et al. Pain as a nonmotor symptom of Parkinson disease: evidence from a case-control study. Arch Neurol 65: 1191-1194, 2008
- 5) Barone P. et al. The PRIAMO study: A multicenter assessment of nonmotor symptoms and their impact on quality of life in Parkinson's disease. Mov Disord 24: 1641-1649, 2009
- 6) Koller WC. Sensory symptoms in Parkinson's disease. Neurology. 34:957-959, 1984
- 7) Beiske AG et al. Pain in Parkinson's disease: Prevalence and characteristics. Pain. 141: 173-177, 2009
- 8) Ford B. Pain in Parkinson's disease. Clin. Neurosci. 5: 63-72, 1998
- 9) Quinn NP et al. Painful Parkinson's disease. Lancet 1: 1366-1369, 1986
- 10) Sage JI. Pain in Parkinson's disease. Curr. Treat Options Neurol 6: 191-200, 2004

この骨子については第4回パーキンソン病・運動障害疾患コンGRESS（2010年10月7日～9日 於 京都）のポスターセッションで発表した。

また、この調査については「アステラス製薬公募制活動資金助成」の「患者会支援活動資金」の助成を得た。この調査に協力いただいたパーキンソン病患者の皆さん、及び関係者の方々に感謝する。